

不死のパロディ、ノスタルジー：  
西欧における自動人形とサイボーグの運命  
ミシェル・チボン＝コルニヨ（EHESP・社会科学高等研究院）

自動人形やサイボーグといった人造人間<sup>1</sup>は、ひ弱な哺乳類、不確実な「皮と骨と体液でできた袋」<sup>2</sup>である人間の時間と大きく異なる、奇妙な時間的境遇におかれている。この人造人間という不死で自律的な存在が至るところで確認されることから、西洋における自動人形の製作・改良にまつわる探求とその分析の重要性は明らかである。この探求の分析は、18世紀から19世紀の境目にドイツロマン主義思想の創設者たちによって始められた。それゆえ、彼らのことから始めたい。

### 1. ゴーレムとロボットの魔術的源泉

1816年、E.T.A.ホフマンによる物語『砂男』(der Sandmann)<sup>3</sup>が世に出た。カバラ<sup>4</sup>と錬金術<sup>5</sup>に精通していたホフマンは、狂気に直面した主人公の若者ナターナエルの足取りをたどり、彼の“幻覚”と、彼の忘我の恋の対象である有名な自動人形の女性・オリンピアとを結ぶ糸を効果的に際立たせている。この素晴らしいテキストは、音楽家や詩人、哲学者のインスピレーションの源となり、100年後の1919年に出版されたフロイトの『不気味なもの』<sup>6</sup>(das Unheimliche)のなかで長大な註釈を付されることになった。

この精神分析的アプローチの出版からさらに100年が過ぎ、フロイトの主張は、時間の経過のうちにその大部分の正当性を失った。だがその逆に、今日の読者にとっても、『砂男』の物語は当時と変わらず謎めいている。E.T.A.ホフマンが、かつてないほどに現代性を持っていることを認識しなければならない。

フロイトは『不気味なもの』のなかで、オリンピアを心地よい気晴らしに過ぎず、「不気味なもの」という感情を喚起することのない存在としている。「しかしながら私は言わねばならないし、『砂男』の読者の大半の同意を得ることを願うが、生きているように見える人形のオリンピアの主題が、物語の生み出す類なき不気味なものの印象の唯一の元凶だと見做すことは全くできない…。生きている人形など、もはや恐怖の問題ではない<sup>7</sup>」。「生きている人形」を怖がる者がいるだろうか？「生きている人形」という言葉で、フロイトは、オリンピアの存在、ナターナエルの欲望を誘うことができる自動人形の女性の存在が、物語において指していると考えられるものを、無力化してしまう。フロイトは、E.T.A.ホフマンが、オリンピアを介して未来に放ったメッセージの核心を見抜きも、理解もしていない。小説のなかに導入されたこの自動人形は、単なる「幻想趣味」をつくりだ

すだけではなく、近代の科学・技術の製作が向かうであろう方向に対する驚くべき直感の現われなのである。

ホフマンが現代的なのは、彼が、西欧人の自動人形とサイボーグ製作への「神秘主義的」参入を明示した最初の人間だからである。自らの運命を機械とサイボーグに委ねるといふ集団的意思は、不死に近づくための代償であることを、彼ははっきり示したのである。われわれは皆、E.T.A.ホフマンの同時代人であり、ナターナエルの兄弟・姉妹であり、ナターナエルが友人のジグムントに言った次の言葉を口にすることができる。「オリンピアの口数が少ないのは、たしかにそうだ。しかし、そのわずかな言葉が内部の世界を表す純粋な象形文字となって、愛情に満ち溢れ、永遠のあの世における精神生活とはいかなるものかを、高度に認識しているもののように見えるじゃないか（…）<sup>8)</sup>」。自動人形のオリンピアは、神の本質であり、オリンポス山から来た者であって、ナターナエルを不死の運命へと誘うのだ。

### 物語のいくつかの筋

E.T.A.ホフマンが語る物語は、ナターナエルとナターナエルの婚約者クララの兄弟ロータルとの間の文通の形式で書かれている。第一の手紙から、ナターナエルは、現在の幸福にも関わらず、彼がごく幼い頃に父親の死にまつわる出来事に関係したときのことを思い出さずにいられないとロータルに打ち明ける。ナターナエルはこの友人に語る。時々、自分の母親が「砂男」がお父さんに会いに来るからと言って、子どもたちをいつもよりずっと早い時間にベッドに追いやっていたことを。そしてこうした晩にはいつも、ナターナエルは階段を上る訪問者の重々しい足音を聞いていた。ナターナエルは当然ながら乳母に砂男が誰なのかを尋ねたが、「寝ようとしないうちの子どもが来るところには一握みの砂をその子どもの目に投げつける意地悪な男で、砂があたった子どもはあまりの痛さに飛び上がって泣きじゃくることになる」と乳母は言うのだった。

事実を確かめたいと思った幼いナターナエルは、砂男が誰であるかをその目で見ようと実験室に身を隠した。すると現れたのは、胸がむかむかするような恐ろしい人物、弁護士のコッペリウスだった。身を隠し、コッペリウスと父親が生命体を作ろうとしている場面に密かに立ち会ったことを、ナターナエルはロータルに語る。恐怖のあまり実験室で気を失ったナターナエルは、コッペリウスに捕まってしまう。するとコッペリウスは、ナターナエルの目をえぐりとりとうとする。コッペリウスはナターナエルの父親の願いを聞き入れ、それは諦めるが、その機会を利用して「僕の両手両足の仕組みを間近でつぶさに観察した。そして僕の体を乱暴につかみ、関節をぼきぼきと鳴るほど強く、手や足をひねくりまわしたり、

こっちを向かせたりあっちを向かせたりした」<sup>9</sup>。ナターナエルが砂男と同一視したこの謎の弁護士であり機械技師であるコッペーリウスは、軋む音のような声、耳障りな笑い声、大げさな身振りをし、彼自身も奇妙なほど機械に似ていた。この出来事の後、幼いナターナエルは、重い病に倒れ、それから一年後に、父親は錬金術の実験の最中に仕事部屋で起きた爆発のために亡くなってしまう。こうして生命体を作り出す計画をめぐって、「ナターナエルの父親と弁護士コッペーリウス」を結ぶ最初の二項式が明らかに示されるのである。

父親の悲劇的な死から何年も経ち、ナターナエルは、ゲッティンゲンの学生となっている。彼はロータルにふたたび手紙を書き送り、「スパランツァーニ - コッポラ」という二人組と交際していることを知らせる。この奇妙な二人組は、目を見張るほどに精緻な技法で人造物を作り出すことに専心していた。ナターナエルは、「ゴッティンゲンの物理学教授であるスパランツァーニ」とやらが、機械的、科学的な方法でこれらの人造物を製作しているという。ナターナエルはさらに詳しく説明する。「この教授は、ここに来たばかりで、かの有名な博物学者、スパランツァーニと同じ名前で、しかもイタリアの出身の人です」<sup>10</sup>。ホフマンにとって、物語の中でスパランツァーニの仕事の科学的・技術的な次元をなおざりにすることは問題外である。全ヨーロッパで有名な生物学者、スパランツァーニの存在を、ここに借りていることを、ホフマンは隠そうとしていない。それは物語の冒頭におかれた生命体の創造という魔術的／錬金術的企て<sup>11</sup>を、人間の再生産に関わる近代の科学・技術の誕生と発展に結び付ける目的で行われている。そして小説は、この二つの次元を、男たちを誘惑するまでに完璧な女性の自動人形の製作へと意識的に収斂させてゆく。

書簡小説の形式を捨て、ホフマンは、ナターナエルを襲う出来事の悲劇的展開を語る。ナターナエルは、スパランツァーニ教授の娘だと思い込んでいるオリンピアという名の娘に恋をする。幾多のためらいの末に、ナターナエルは結婚を申し込むために教授の家を訪ねるが、階段を上っているとき、彼はスパランツァーニと彼の助手である機械技師のコッポラとがつくる恐ろしい場面に遭遇する。仰天しているナターナエルの眼の前で、二人はオリンピアの身体を双方に引っ張り合い、ついにはそれを壊してしまう。階段に散らばる自動人形オリンピアのばらばらになった四肢、眼球の抜け落ちた眼窩を見て、ナターナエルはふたたび精神病的な錯乱に陥る。長く患った後に正気を取り戻したナターナエルはクララとの関係を修復し、人生を共にするべく歩み始める。だが種々の痛ましい事情が重なり合い、彼はふたたび恐ろしい狂気に沈むようになり、ついには故郷の町の町役場の塔から虚空へと飛び、自ら命を絶つ。彼は眼下の群衆の中に、幼い日に見た砂男・コッペーリウスの恐ろしい姿を認めたと思ったのだった。

## スパランツァーニとその歴史上の分身：ラザロ・スパランツァーニ

注意深く読むならば、予期しなかった複数の新しい次元が物語から浮かび上がってくる。ホフマンは彼の周囲で生じていた、生物学の非常に重要な発展について知っていた。同時代の生物学の実験による進歩の数々をもとにして、彼は、たとえば体外受精の分野という、今日ですらなお解決の目途が立っていない科学・技術分野の出現について書いた。

先に引いたシーケンスをもう一度取り上げよう。オリンピアを作り出したのは、スパランツァーニというゲッティンゲン大学の物理学教授であり、彼は「かの有名な博物学者スパランツァーニと同じ名前で、しかもイタリア系の出身の人」とナターナエルによって詳しく説明されている。さらに注意してホフマンのテキストを読むと、自動人形のオリンピアはある「実在」となるが、それは物語の作者の予言者的な明晰さによって増幅された不安で不気味な現実なのである。

少し調べれば、ラザロ・スパランツァーニという人物が実在したことが明らかになる。彼は生物学の歴史において有名な博物学者で、1729年に生まれ1799年に没した司祭である。彼は、人間型自動人形の製作者である想像上の人物スパランツァーニSpalanzaniとほぼ完璧な同形意義（«l»一つの欠落による）の名前を持っている。この「現実世界の」スパランツァーニ(Spallanzani)は、循環器の研究と受精の研究によって非常に有名だった。ついに自然発生説に異議を唱えた彼は、受精を行うために卵と精子の間の緊密な接触が必要であることを証明した。1777年、「自然が両棲動物を増やすのに用いる方法を真似て、この動物種に人工的に生命を与えるために」、彼は卵と精子を小杯のなかで混ぜ、両棲類の人工授精を行った。このように、18世紀の生物学を学ぶ上で避けて通ることのできない人物であり、人工受精の最初の機械技術者である歴史上のスパランツァーニと、生きている人間をまねる機械の製作者である物語内のスパランツァーニとが、現実と書かれた物との間で対応関係を持つ。

このとき、物語の中心となる次元の一つがはっきりと出現する。それは科学の対象の向かう方向の提示であり、その方向が、当時の生物学と近代的自動人形の製作の発展、すなわち機械化された生体と、生命を与えられた機械が結び付く新しい世界の形成を目指していることはすべての読者に明らかだ。ホフマンにおいては、以前、私が他所で発言した次のような現状確認の前兆となるヴィジョンは確認されない。「幾千もの研究者たちが、今日、動物や人間の肉体的かつ精神的な活動の広がりすべてのまねることのできる機械を作ることを試みている。さまざまな研究室の中で、研究者たちは、生体の基本的部分を技術的な手続きの中に組込んでいる。生命を与えられた自動人形と機械化された生体は、結び付き、混合される

ようになる。奇妙でありながら非常にわれわれに近いこれらの実在との出会いの終焉は、一体どこで訪れるのか？ 彼らは私たちの身体の境界を越えるだろうか？<sup>14</sup>」。想像上のスパランツァーニと歴史上のスパランツァーニの二人組が示しているのは、思いもかけないような科学的・技術的発展の出現の可能性だが、それによって、まさにわれわれは注意を引きつけられ、不安を感じる。

### 錬金術の壺からガラスの小杯へ：科学とその分身

ホフマンは、科学・技術の向かうであろう地平を示しただけではない。物語のなかでホフマンは、こうした科学・技術の出所にあるものは魔術だとはっきり名指ししている。物語の構造が、なによりもまず二つの二人組——第一に主人公の父親とコッペリウス、第二にスパーニ教授とその助手である機械技術者・光学専門家のコッポラー——に支配されていることはすでに示した。これらの人物の対応は、CoppeliusとCoppolaという苗字によって明示されているが、これらの苗字に共通の語根、cuppa、coppaとは壺、容器を意味した。cuppaは同時に錬金術の実験を行うための容器の名であり、歴史上の人物スパランツァーニが体外受精を行った小杯を指す<sup>15</sup>イタリア語coppellaは、この語から派生している。

ホフマンの入念な苗字の選択、非常な教養と奇妙な直観から、必然的に確認されるのは以下のことがらである。つまり、コッペリウスとコッポラの名は同一の語から派生し、その語はナターナエルの父親がコッペリウスと共にホムンクルス小人<sup>16</sup>（訳注：錬金術師たちが作ったと称した人造人間）を製造するべく行っていた錬金術の実践の主要な道具と、体外受精の実験が行われた小杯を同時に意味していることを、物語の作者は知っていた。魔術と科学とは、その方法や知識を語る言語表現の相違によって切断されるのか、それとも意図、あるいは世界と人間に対するヴィジョンの相違によってもっと深いところから切断されるのだろうか？

物語のなかでホフマンは多様な面から、魔術と科学との関係に明確に取り組み、同時に技術と科学が進むであろう奇妙な道のりについて書いている。そこで、ホフマンが驚くべき才能をもって切り開いた複数の方向を探索してみよう。

## 2. 科学の対象：不安を誘う奇妙さ

### ゴーレムからロボットへ

ホフマンは錬金術・カバラ的な二人組と、生物学的・機械的な二人組を、彼らの苗字と研究対象によって緊密に結び付ける。それによって彼らの間の深い類縁性が示されるが、その類縁性とは、人間を造物主の地位に置く知識と変容を得んとする共通の願望である。幻想的とかありそうもないこ

ととかなり表面的に呼ばれているものと、科学的アプローチを通して実験室の中で精錬されつつある新たな現実との交差する点を設定することを、ホフマンは望んでいる。彼の作品に本質的なこの主題を、ホフマンは、自らが占めるテキストの中の複数の役割の中の一つ、複数の声の一つによって表明している。「おお、読者よ！ そうなればあなたはもしかすると、現実の世界ほど不可思議で気違いじみたものはない、そういう現実生活など文学者はせいぜい、くもりガラスの鏡に暗くぼんやり反射したもののようには、とらえることが出来ない、そうお信じになり始めることでしょう」<sup>17</sup>。幻想と現実の科学の交差という主題は、ドイツロマン主義の一部のサークルにおいて繰返し表れるが、完全なる夢想が、現代科学の想像上の根源としてこれほどはっきりと表明されていることは、非常に稀である。そこにこそ『砂男』の読書が示唆するいくつかの道筋があるのであり、それは文学作品の地平がすでに開いてきたものである。しかしながらひとまずそれは置いて、物語のスパランツァーニと歴史上のスパランツァーニという驚くべき二人組に話を戻す必要がある。

## 現実世界のスパランツァーニ：生体の機械化と完成した変容 生体の機械化の動き

ラザロ・スパランツァーニは、生物学の広大な歴史、すなわち構造還元主義の歴史上に位置づけられる人物である。この構造還元主義という運動は、精緻さを増していく生体の支配と制御とを段階的に配置することを可能にしたのであり、今日でもわれわれはその影響の中にある。最初の人工授精の技術を完成させ、受精の理解に貢献したスパランツァーニは、この試みの責任者の一人だった。彼の行った受精の人工化は、デカルトが導入した原理に深く依拠している。

事実、近代生物学の基礎原理の一つである構造還元主義を最初に示したのは、デカルトだった。「機械のすべての規則は自然学に属しているのは確かであるから、人の手によるすべての物もそれゆえに自然の物である。たとえば、時計がその歯車の働きによって時刻を指すとき、それは木が果実を生むのよりもより自然でないと言ったことはない」<sup>18</sup>。デカルトにとって、新たな「機械」により巧みな分析が可能な生気を持たない物質と、生体とは、存在論的に違いが無いのだ。

このタイプの還元主義は、古典主義時代の機械論の端緒であったが、近代生物学の主要な前提の一つでもあり続けている。たとえばエルンスト・マイヤーは、著書『生物学の歴史』のなかで、構造還元主義と彼が呼ぶものを次のように定義している。<sup>19</sup>「この原理は、有機体の物質的構造は、無機の世界に確認されるものとなんら変わることがないことを示す。そのうえ、この原理は、すべての生命体の世界に見られる出来事や過程もまた、

原子や分子の中で効力を持つ物理化学の現象と相反することがないことを主張する」<sup>20</sup>。

この説明は、生物学における還元主義という概念のもつ意味を組み尽くしてはいない。それは17世紀から18世紀にかけて物理数学的モデルが導入された歴史によって示されている。事実、デカルトの思考のなかで数学はなお中心的な位置を占め、彼の思考の本質をすら形成しているし、そこからマイヤーが「方法的還元主義」と呼ぶ、あらゆる科学における分析方法の基礎である「方法の規則」が生まれるのである。

この方法的還元主義は、昔も今も、すべての科学、特に生物学の規則において決定的な役割を果たしている。生体研究への方法的還元主義の適用にあたっては、厳格な機械論的立場の支持者と生氣論者とのあいだで困難や衝突がなかったわけではなかった<sup>21</sup>。それにも関わらず、この分析的還元主義によって、徐々に生体の分解が可能になっていった。生体は何よりもまず、最も本質的な諸成分の総体として常に認知される。すなわち、生物全体から、器官、組織、細胞、細胞抗生物質、巨大分子そして最後に分子へと生体の分解は進むが、これがまさに生物学の歴史のたどった道である。

しかし西洋の科学に特有の合理主義は、思弁的であるばかりではない。それは一種の戦闘的な理由により実践的かつ変形的である。生体を構成する各段階の検出と隔離は、実験と手術を常に伴ったため、結果と検査の配置が可能になり、それらは実施のたびに効果を増していき、無生命の物質を機械化する過程に接近していくことになった。体系的な研究により<sup>22</sup>、還元の段階（器官、組織、細胞、細胞抗生物質、巨大分子）と、そこから得られた機械化の程度との相関関係が示されることになる。

ラザロ・スパランツァーニの人生と仕事が統合されるのは、こうした強力な運動のうちなのだ。

### 想像上のスパランツァーニのしるし：機械の生命化

いま一度、階段の場面を取り上げよう。主人公は、ついにオリンピアに愛を告白し、彼女に人生を捧げるためにスパランツァーニの家の階段を上る。彼は、二人の製作者たちが恐ろしい口論をくりひろげながら、オリンピアの体を引っ張り合っているのにぶつかる。コッポラはこの自動人形の女の体を拾い集め、スパランツァーニに激しい一撃を加える。するとスパランツァーニは「フラスコや、蒸留器、小瓶や試験官のなかを」テーブルの上によろめき、倒れる。コッポラは彼らの科学の目的である自動人形を持って階段を降りていく。彼が通る傍らで、ナターナエルはオリンピアが「美しい木の人形」に過ぎないことを知る。彼女にはもはや目がなく「そのあとが、黒い孔になっていた。それは生命のかよわぬ人形だったのだ」。

ガラスの破片で傷を負ったスパランツァーニは、立ち上がるとナターナエルにこう言う「あいつのあとを追え、あとを追えたら。なにをぐずぐずしてるんだ。コッペリウス、コッペリウスのやつが、私のいちばん上等の人造人間を強奪したんだ。あれには20年もかかったんだ。からだも生命も賭けてつくったんだ。あの歯車装置、喋る、歩く、わたしのもの、あの目玉。おまえの目玉が盗まれたんだ。いまいまいやつ、呪わしいやつ、あいつを追え。オリンピアを取り返してくれ。あそこに目玉がある！」<sup>23</sup>。この台詞によって、何本もの糸が結び合わされる。スパランツァーニは、コッペリウスとコッポラが同一人物であったこと、ナターナエルの目を盗もうとしたのはコッポラであったこと、そして二つの二人組は結局同一であったことを告白しているのだ。ここに広大な解釈の地平が開かれるが、この物理学教授が、オリンピアの歯車装置、言葉、外見、足取り、一言でいえば風貌を作り上げた20年間の研究を考慮に入れよう。

この展開の幻視的性格は、われわれを驚かせる。なぜなら、この作品が書かれた後、アラン・チューリング、ジョン・フォン・ノイマン、ノーバート・ウィーナーの仕事に続く新しい自動人形の理論の誕生と発展があり、さらには抽象的「オートマタ」からコンピューターという具体化された「オートマタ」<sup>24</sup>への漸進的移行にわれわれは立ち会うからであり、そこから「新機械論」に基づく機械の新たな傾向が目指すものの一つが、機械に生命を与えることであることをわれわれは知っているからである。

テキストの複雑さ、そして二つの物語——現実の生の物語と、それとは全く異なるナターナエルの「幻想的」物語——によりホフマンが展開する鏡の効果に気づく時、不気味さへの感情は一層強くなる。そしてこの現実の生の物語とは、当時の近代的科学・技術から生まれ出でつつある物語であり、ホフマンは微かな指標からその未来における発展の姿を捉えたのだ。人間の形の自動人形は、このテキストにおいて、機械化された生体と結び付く。これがホフマンのメッセージであり、この状況が「不気味なもの」の感覚を生むのは、それが人間社会の前途であり、人間のなかへの自動人形の到来を告げているからなのだ。

### 3. 還元主義、不死性と死の衝動

フロイトは著書『快樂原則の彼岸』<sup>25</sup>で、人間の精神生活には、抑制不可能な運動、トラウマを与えた出来事を反復する欲動のようなものが存在すると書く。後に彼は、この反復強迫をもとにして自らの精神分析概念の根底的な再編成を行うだろう。フロイトによれば、この強迫の根源は、生物学の指摘する生体の特徴、すなわち無生命への一般的回帰のうちにある。生物学の還元主義的方法は、生命体と生命を持たない物体を分ける境界が不在であることを常に主張しない。このフロイトのテキストが問題として

いるのは、精神分析的アプローチのなかに、個体の死も最後の徴候ではないこの無生命への恒常的回帰の研究を、体系的に導入することである。このフロイトの難解なテキストに関しては歴大な研究が存在するが、私はそのなかのごくささやかなもの、無生命の問題について考察したいと思う。

生物学の卓越した教育を受けたことから、フロイトは科学的方法における還元主義の真の重要性を知り得た。その物理数学のモデルは、ブリュッケ・ヘルムホルツやドイツ語圏の偉大な生物学者たちによる当時最高のものであった。そしてこのモデルによって、この生物学における還元主義発展の重要期に、シュレーデンやシュワンは、生体の最初の単位である細胞を発見したのだった。シュレーデンの弟子であったツァイスが発展させた顕微鏡のおかげで、フロイト自身も、細胞をその構成要素の下部細胞に分解し、生化学における分子的アプローチを行うことができた。一言でいえば、フロイトは当時の科学と技術の発展が、複雑な生物をその最も基本的な構成要素である無生命の要素へと還元することが、自らのあらゆる研究にインスピレーションを与えることを熟知していたのだ。この無生命とは、生命体、特に有性の生命体の生を終わらせる無生命ではなく、あらゆる現象に物理数学的形式主義を導入しようとする方法としての無生命である。これら二つの無生命という語に意味論的な関係があるとしても、その二つの語の意味は全く同じでないことは明らかだ。生命体研究において近代の科学と技術が探求している無生命は有機的な無生命であり、それらは集合して、この物理数学的形式主義に包摂される。そしてこの無生命もまた、理論化の努力のゆえに、生命はないが生きている要素で構成される技術の寄せ集めである機械や自動人形の内に集められるのである。

科学の主体は、死と死から逃れる意志によって特徴付けられる主体である。この主体が必要としているのは、死んだ身体という無生命に代わり、不死の領域を開く道である。混沌として狂った無生命に代わるのは、有機的で、反復的に生気を持ち、不死へし漸近する無生命である。自動的で感情を偽るこれらの機構の内部の連関は、人間の文化のなかでいつも問題を提起してきた。自動人形の製作の神話と、自動的に概念を生み出す形式を持つ偉大なシステムに基づいた人間型機械の製作という古くからの技術の模索が分岐することによって、この欲望の計画、この死からの逃亡の意志が真に変容するのである。死と非常に密接に結び付いた不死の欲望が、ナターナエルに生命を与え、オリンピアの表情のない瞳に生を吹き込んだのである。ここでもう一度ホフマンを引用しよう。「オリンピアは、何時間でもわき目もふらずじっと恋人の目を見入ったなり、身じろぎ一つせず、その眼差しはいよいよ熱烈に、いよいよいきいきとしていくのであった」<sup>26</sup>。これと同じ欲望が、スパンツァーニとコッポラとナターナエルに命を与えているのであり、ナターナエルがこの企ての成功のために自らの目

を捧げるのは、心から望んでのことなのだ。ナターナエルは科学の主体であり、「引き裂かれた魂」とホフマンが物語の最後の文で書くように、分断された主体である。彼は、死すべき人間の条件に執着している。彼はクララや友人たちを愛し、彼らからも愛されている。しかし彼は、自分の存在の深淵を説明してくれる科学の産物である自動人形をも愛している。「おお、素敵な、深い魂をもった人だ、とナターナエルは自分の部屋で叫ぶのであった。きみだけしか、きみだけしか、僕のことをわかってくれないのだ」<sup>27</sup>。しかしナターナエルは、朝の目覚めの時など明晰で良識を備えている時に、オリンピアの完全な受動性と無言を思い出しては、こう言っていたのだ。「言葉なんてなんだ。言葉なんて！彼女のこの世のものならざるまなざしが、地上のいかなる国語よりも多くのことを語っているのに。だいたい天国の子たるものが、哀れむべき地上の必要のために一線をひかれた狭くなるしい圏内に埋没してなどいられるか？」<sup>28</sup> 自動人形のオリンピアは、神の本質を持っている。彼女はオリンピアから来た者なのだ。彼女は、ナターナエルを不死の宿命へと招くが、それはナターナエルの欲望であると同時に、科学の主体の欲望であることをわれわれは知っている。

ナターナエルの異常な行動が生み出す問いに対する答えはおそらく存在しない。それゆえ、ホフマンは、狂気に憑かれた主人公と、その親友、ナターナエルを支え、癒すジークムント(ジークムント・フロイト!)との間に交わされる次のようなやり取りを書いたのである。

ナターナエルは彼に言う。「オリンピアの口数が少ないのは、たしかにそうだ。しかし、そのわずかな言葉が内部の世界を表す純粋な象形文字となって、愛情に満ち溢れ、永遠のあの世における精神生活とはいかなるものかを、高度に認識しているもののように見えるじゃないか…」。

「きみ、ひどいこと言うなよ」とジークムントはすこぶる穏やかに、ほとんど悲哀に近い様子で言った。「どうもきみはけしからん道に踏み込んでしまったらしいな。ぼくを頼りにしてくれたほうがよさそうだが、もしなにもかもが——いや、もうこれ以上は言うまい!」。ナターナエルはふとこのとき、冷静で散文的なジークムントが、自分のことでたいへん誠実に思ってくれるような気がしたので、差し出された手をほんとうに心から握り返したのであった——。<sup>29</sup>

.....  
<sup>1</sup>. ゴーレム ((גולם)は粘土でできた人造人間であり、額(あるいは口など版によって異なるが)に聖句を書き込むことで一時的に命を与えられる。

<sup>2</sup>. プラトン『饗宴』、「こう言ってゼウスは、人間どもを二つに切っていた。そして彼が切っていた人間の顔と半分になった首とを切り口の方に向け換え

るよう、アポロンに命じた。つまり、そうされた人間が自分の切り口を見てもっとおとなしくなるようにと、ゼウスは意図されたからである。そこでアポロンは顔を向け換え、また皮膚を四方八方から今日のいわゆる腹部へと引っ張り寄せ、腹の真中で口を一つ作って、それをきんちゃくのように結び上げたが、これが臍と呼ばれているものだ。」

Platon, *Le Banquet*, Flammarion, Paris, 1992, page 55.

3. E.T.A. Hoffmann, *L'homme au sable*, Aubier-Flammarion, éd. bilingue, trad. G. Bianquis, Paris, 1968, p.67 et 69.

4. ゴーレムの主題については、以下を参照のこと。Moshe Idel, *Le Golem*, préface de Henri Atlan, Cerf, Paris

5.

6. S. Freud, *L'inquiétante étrangeté*, in *Essais de psychanalyse appliquée*, Gallimard, Paris, 1975.

7. S.Freud, *Ibid.*, p.176.

8. E.T.A.Hoffmann, *Ibid.*, p.103

9. E.T.A.Hoffmann, *Ibid.*, p.47

10. E.T.A.Hoffmann, *Ibid.*, p. 61.

11. この創造物は、ゴーレムかホムンクルス小人の系譜に属している。ゴーレムの主題に関しては、Moshe Idel, *Le Golem*, préface de Henri Atlan, Cerf, Paris, 1993を参照のこと。ヨーロッパの知識人におけるカバラの影響（特に16世紀における）については、Frances Yates, *Giordano Bruno et la tradition hermétiste*, Dervy livres, Paris, 1988を参照のこと。しかしながら、錬金術とカバラという二つの伝統を区別することはおそらく重要であり、以下の著作ではそれが指摘されている。André Neher, *Faust et le Maharal de Prague, le Mythe et le réel*, Paris, PUF, 1987.

12. E.T.A. Hoffmann, *L'homme au sable*, Aubier-Flammarion, éd. bilingue, trad. G. Bianquis, Paris, 1968, p.61.

13. L.Spallanzani, *Expériences pour servir à l'histoire de la génération*, Genève, 1785.

14. M. Tibon-Cornillot, *Les corps transfigurés - Mécanisation du vivant et imaginaire de la biologie*, Seuil, coll. science ouverte, Paris, 1992, p.14.

15. 「同様に、蒸留器は、精製の装置であることから必然的に、頭部、精神、欲望を象徴する。Thass-Thienemannは、ラテン語のcupaが末期ラテン語のcuppa、英語のcup、ドイツ語のKopf（頭）に変化したことを観察している。この頭－壺という意味論的一致から、錬金術の頭－壺（蒸留器、le vas hermeticum）へと至る錬金術的方程式までは、あと一步に過ぎない。ギリシアの錬金術師たちにとっては、同様の対等性が、Lithos enkhephalos（石－頭あるいは賢者の石）、およびLithos あるいは lithos（石ではない石、つまり脳）として存続している。」

Arturo Schwarz, *La machine célibataire alchimique*, in *Les machines célibataires*, Alfieri Editore, Venise-Martellago, Juillet 1975, p.162 et 163.

16. ホフマンが、ここでゲーテがその主著のなかで取り上げる神話的人物ファウスト博士と結びついた有名な錬金術のテーマであるホームクルス小人を暗示していることは確実である。

17. E.T.A.Hoffmann, *Ibid.*, p.67 et 69.

18. R.DESCARTEs - *Les Principes de la Philosophie* - La Pléiade, Gallimard, Paris, 1953, p.666.

19. E.MAYR - *Histoire de la biologie* - Fayard, Paris, 1989.

20. E.MAYR - *Ibid.* - p.69.

21. 生氣論とは、生命を生体に命を与える自立的な原理とみなす態度である。生体はゆえに、生命のない物質の知識に固有な方法によってでなければ研究することができないだろう。この原則を理解するための諸解釈は、当然ながら、非常にそれぞれ異なっている。

22. E.T.A. Hoffmann, *Ibid.*, p.105.

23. この相関関係に関しては、さらに詳しい紹介が著者による国家博士号論文 *Des automates aux chimères. Enquête sur la mécanisation du vivant* - Université de Paris I, février 1991、および前に引いた拙著、*Les corps transfigurés - Mécanisation du vivant et imaginaire de la biologie*, Seuil, coll. science ouverte, Paris, 1992で展開されている。

24. E.T.A. Hoffmann, *Ibid.*, p.109

25. この主題は、情報科学の創造とコンピューターの製作に主要な役割を果たしたジョン・フォン・ノイマンの著作のすべてに確認される。

26. Freud S. - *Au-delà du principe de plaisir* - in *Essais de psychanalyse*. Paris : Éditions Payot, 1968,

27. E.T.A. Hoffmann, *Ibid.*, p.105.

28. E.T.A. Hoffmann, *Ibid.*, p.105.

29. E.T.A. Hoffmann, *Ibid.*, p.105 et 107.

30. E.T.A. Hoffmann, *Ibid.*, p.103.